




業 種	鉄道・軌道
取組分野	教育・訓練
テ ー マ	運転シミュレータによる軌道内作業員への運転体験教育
取組の狙い	<p>触車事故の防止の観点から、線路内立入り作業の多い保線及び電気施設保守の現業部門を対象に、運転士には作業員の待避状況がどのように映るのかを体験させることにより、意識の差を埋めること。</p>
具体的内容	<ul style="list-style-type: none"> ・保線係員による軌道内作業時の列車待避不良事象は年間1～2件程度発生しており、場合によっては急停止措置など列車運行に影響する事象も発生していた。 ・この事象に対し、同種の問題を懸念していた電気部門も加え、運輸部門との間で課題共有を図っていた。そのような中、日々の軌道内作業に従事している保線係員が、「<u>列車待避不良は、運転士と軌道内作業係員では待避行動を開始すべきと考える時機、すなわち双方が危険と感じるタイミングが異なるために発生するのではないか。</u>」という疑問を持ち、この意識の乖離を埋めるためには運転士目線で体感してみることが効果的であると考え、自ら運転シミュレータを導入した本教育の実施方を発案した。また、同じ課題を持つ電気部でも、保線課での導入後、本教育を取り入れた。 ・本教育では、机上での触車事故防止、特に運転士の前路注視に関する座学教育に加えて、乗務員教育に使用される運転シミュレータの異常時訓練メニューを活用し、運転士の視線から作業員の待避状況がどのように映っているのかを体験させた。これにより運転士の操業状況を理解させ、触車事故の防止に繋げた。 ・本教育導入に際し、最も苦勞した点は、受講者が興味本位で運転シミュレータをさわるといふことにならないよう、教育の目的を明確に伝えることであった。 <div style="display: flex; justify-content: space-around; margin-top: 10px;">    </div> <p style="text-align: center; margin-top: 10px;">運転シミュレータと運転体験教育の様子</p>

取組の効果	<ul style="list-style-type: none">・保線課は約 40 名、電気部は約 80 名が受講し、教育実施（平成 24 年 6 月）以降、列車遅延を伴う待避不良事象は発生していない（平成 25 年 11 月 22 日現在）。・受講者からは「運転士が目線で軌道内作業者がどう見えているのか分かりやすかった。」、「電車は急ブレーキが効かないということがよく分かった。待避は早期に行うことが原則であると改めて確認できた。」の反応があった。また、電気部が事後アンケートを実施したところ、ほぼ全員が有効な訓練であったと評価している。
事業者名	阪神電気鉄道株式会社 運輸部 (連絡先 06-6457-2224)